

シリーズ

秘蔵写真

今は昔の林業

第37回

中部森林管理局総務課

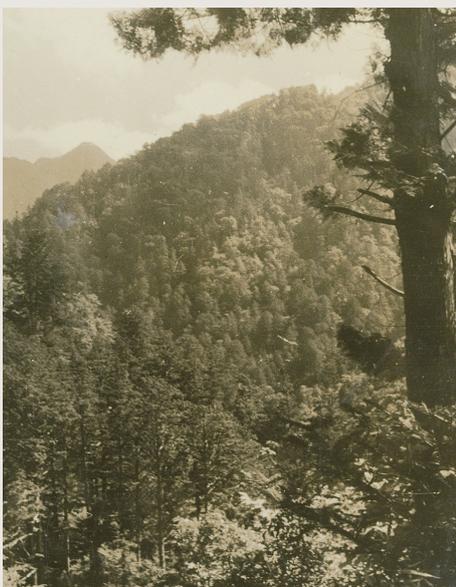
井上 日呂登

今は昔、山村に暮らす人々とその生業としての林業を当局秘蔵の写真とともにご紹介します。

「裏木曾」その一

裏木曾とは

東濃森林管理署管内、現在の中津川市の北部の森林地域はかつて、「本木曾」「表木曾」と呼ばれた信州側の木曾地域に対して阿寺山地を挟んで「裏木曾」と呼ばれました。江戸時代のこの地域（濃州恵那郡加子母村、付知村、川上村）は木曾地域と同様に尾張藩領であり、時代によって、「裏木曾三ヶ村」「濃州三ヶ村」などとも呼ばれました。



裏木曾の古写真（昭和10年代頃）



昭和20年代に撮られた現在の付知裏木曾国有林（東濃森林管理署管内）

信州側の木曾地域と同様にヒノキ・サワラといった有用な針葉樹資源に恵まれたこの地域の森林の多くは、明治時代の半ば以降は皇室林野局の御料林となります。特に優れた天然ヒノキ材を産出してきたため、近現代の「木

曾ヒノキ」の名声の一定部分はこの地域が担ってきたという見方もできます。

付知川に於ける材木伐出の沿革と繪解

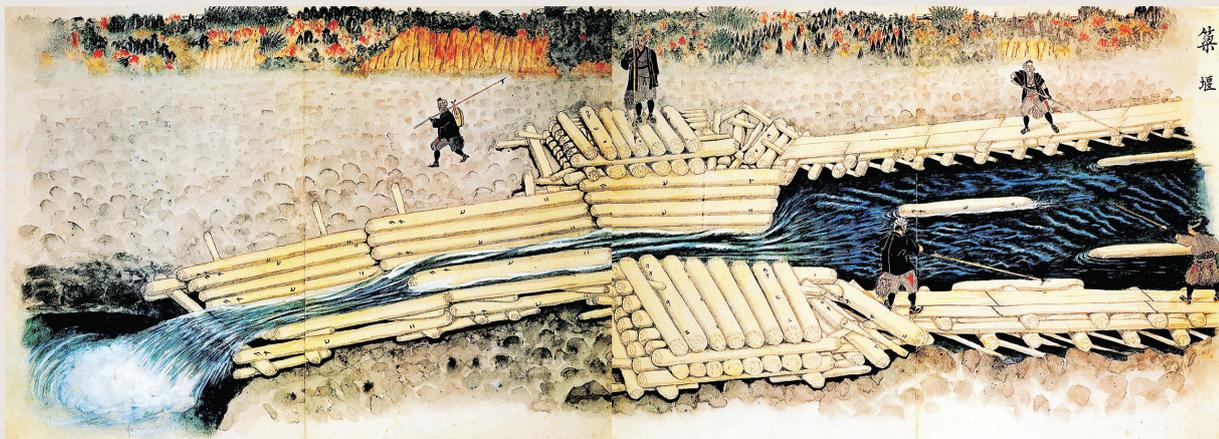
昭和二十八年、付知営林署（現・東濃森林管理署）より「付知川に於ける材木伐出の沿革と繪解」という資料が刊行されます。本というよりは、上・下巻、折り畳み式の絵巻物といった感のある独特の構成となっています。

この資料は裏木曾における機械化以前の伐木運材を描いたもので、特に付知川での流材（川に浮かべた木材をバラバラに流すこと）の最盛期である明治末期から大正初期が舞台となっています。

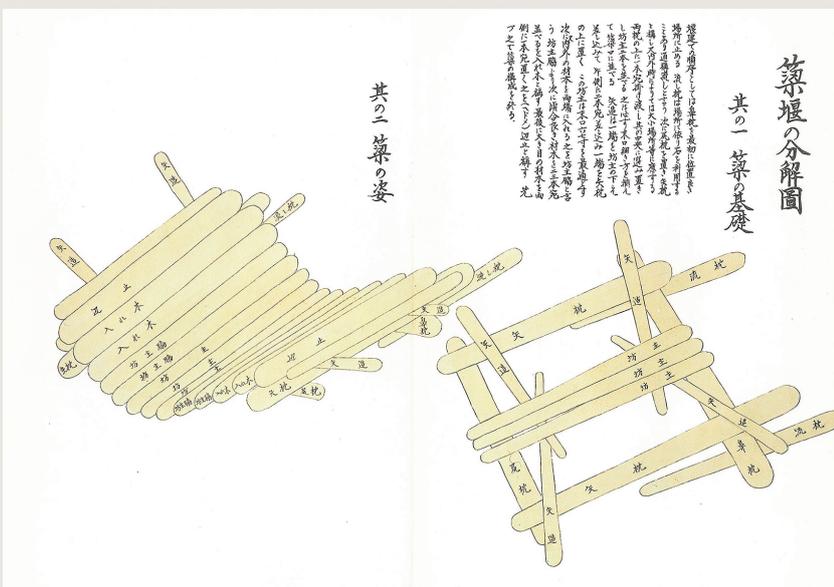


「付知川に於ける材木伐出の沿革と繪解」上・下巻

この資料は当時の付知管林署長からの依頼により、編集・監修を「三千年物語・付知のあ



「付知川に於ける材木伐出の沿革と繪解」より「筏堰」（丸太を水に浮かべて運ぶしかけの一つ）



「付知川に於ける材木伐出の沿革と繪解」より「筏堰の分解図」

ゆみ」の著作がある三尾箕山(金三三氏、画・筆者が牧野彪六郎氏(当時付知管林署職員)、資料の収集に元「総杣頭」であった熊崎元義氏の協力を得て製作されたとされます。
木曾・飛騨地域の古い林業風景を描いた絵図として「木曾式伐木運材図会」(中部森林管理局所蔵)が知られていますが、これの裏木曾版を作ろうという意気込みもあつたようです。
江戸時代後期の伐木運材風景を描いた「木曾式伐木運材図会」とは共通する部分もある一

方、明治・大正時代の服装・風習が見られ、また運材に用いる設備の分解図などは大変詳細に描かれているのが特徴です。



「付知川に於ける材木伐出の沿革と繪解」より「技手」(帝室林野局職員の制服姿)

資料の発行数が限られ、折り畳みの絵巻物風という独特の構成、専門的な説明が取っつきにくいからでしょうか、これまであまり注目される機会の少なかった資料でもあります。描かれている舞台である明治末期から既に百年以上、製作されてからも既に七十年が過ぎ、今後ますます、往時の林業風景を伝えてくれる貴重な資料となってくると思われます。

ここで紹介している写真は、当局サイト「モノクロ森林紀行」で紹介しております。これは、カラー写真のない時代へ時を超えて！むかしの写真を紹介するサイトです。
当サイトへは、コードを讀み込んでください。

